オノマトペの日中比較
――両性オノマトペの視点から――

石川　創

【キーワード】
日中対照、擬音語、擬態語、擬声詞、象声詞

1．はじめに

1.1．研究の目的

現代日本語において、オノマトペとは擬音語と擬態語をあわせたものと考えるのが一般的であろう。擬音語と擬態語の定義には諸説あるが、おおまかには、実際の音声をそれらしいことばで表現するものが擬音語、事象の様子や心情・感覚などをことばで表現するものが擬態語とされている。

日本語では、ある語が擬音語であるか擬態語であるかという判定は機械的であり、ある文脈であらわれたオノマトペは擬音語か擬態語のどちらか一方であると判定される。しかし、たとえば「がつがつ食べる」という文における「がつがつ」は、食べ物をかきこむ音と、食べ物を勢いよく食べる様子の両方をあらわしており、擬音語・擬態語のどちらか一方であると判定するのはむずかしく、適切ではないように思われる。本稿では、このような「音もふくまれていそうな擬態語」あるいは「様子・心情・感覚などもふくまれていそうな擬音語」を「両性オノマトペ」とよぶ。

さらに、オノマトペについて日本語と他言語とを比較すると、中国語のオノマトペには日本語と共通する部分がみられることに気がつく。

端起一杯水，咕嘟咕嘟地喝了下来。「コップを持ち上げてがぶがぶ飲んだ。」
（『中日辞典』第２版（小学館）、p.516）

この例文において、中国語のオノマトペは「咕嘟咕嘟」、日本語のオノマトペは「がぶがぶ」だが、その語のつくりは同じ音を交互にくりかえすABAB型であり、両言語で共通している。

中国語のオノマトペと日本語のオノマトペのかたちに共通点があることは陶振孝（1992）などで指摘されているが、その一方で、中国語には「擬態語」に匹敵する用語がなく、オノマトペといえば擬音語（擬声詞・象声詞）をさすものとするのが一般的である。つまり、この場合の「咕嘟咕嘟」は音だけをあらわすオノマトペということになる。しかし、中国語のオノマトペは、本当に音をあらわす場合にしか用いられないのであろうか。日本語のオノマトペと同様に、中国語の

オノマトペにも「音」という範疇からのひろがりを持つものがあるかもしれない。

本稿では日中のオノマトペについて、特に両性オノマトペの視点から比較し、考察をおこなう。その目的は、日本語の両性オノマトペの視点をあてはめることにより中国語のオノマトペに新たな側面をくわえること、逆に、かたちを中心に共通点の見られる中国語のオノマトペとの対照により日本語のオノマトペの特徴をうかびあがらせることである。

1.2. 両性オノマトペの判定基準

前項では、両性オノマトペの定義を「音もふくまれていそうな擬態語」あるいは「様子・心情・感覚などもふくまれていそうな擬音語」としたが、さらに「その状況において、聴覚が具体的な音をとらえている」ことを、ある語が両性オノマトペであるか否かを判定する基準とする。それは、音声をそれらしいことばで表現しているかということにはこだわらない。

たとえば教師が生徒にむかって「ぺちゃくちゃうるさいぞ。」といったとする。このとき、生徒たちはもちろん「ぺちゃくちゃ。」という発話をしているわけでないが、教師の耳には生徒たちのなんらかの会話が聞こえていよう。その耳障りな声と、生徒たちがさわがしくしている状況を目の当たりにして、教師は「ぺちゃくちゃうるさいぞ。」と注意をする。つまり、この場合の「ぺちゃくちゃ」は、教師の聴覚がとらえた「音」をあらわすと同時に、生徒たちがさわがしく会話をしているという「様子」をもあらわしていると考えられるので、両性オノマトペと判定するわけである。

2. 日中比較(1)——かたち

まず、日本語の両性オノマトペと、それに対応する中国語とのかたちの比較をおこなった。日中のオノマトペの用例は、郭華江（1994）『日中擬声語・擬態語辞典』（東方書店／日本語見出し語数＝1921）から収集し、うち、両性オノマトペと判断される語をかたち別に集計したものが表1である。集計方法は陶振孝（1992）を参考にした。なお、中国語に関しては、かたちがオノマトペの定型（AA, ABB……）でないものはここでは問題とせず、見た目がオノマトペの定型らしくても、形容詞のくりかえしや動詞と補語のくみあわせにすぎないものなども、集計対象からはずしている（紧紧，笑眯眯，晃晃荡荡など）。以下は、表1の結果から日中のオノマトペの性質を考察する。

2.1. 日本語オノマトペの接尾辞「ッ」「ン」「リ」

2.1.1. AB型と「ッ」「ン」「リ」の接続

日本語のオノマトペのAB型は、ほとんどの場合ABッ型をつくることができ

表1　日本語の両性オノマトペとそれに対応する中国語オノマトペのかたち

中国語					日本語				
	型	例	数	%		型	例	数	%
1	A	唔（wu） 嗵（tong） 刷（shua）	31	13	1	Aッ	ガッ、ギュッ	11	11
					2	Aン	ズン	9	
					3	Aー	ヒュー	13	
					4	Aーン	アーン	14	
					5	Aーッ	サーッ	16	
2	AA	哧哧（chichi） 哈哈（haha）	61	25	6	AA		0	9
					7	AAッ	ドドッ	1	
					8	AAン	ズズン	2	
					9	AAーン	ズズーン	3	
					10	AーAー	ギューギュー	15	
					11	AーンAーン	ウーンウーン	4	
					12	AッAッ	ギュッギュッ	12	
					13	AッAー	ブップー	1	
					14	AンAン	シャンシャン	15	
3	AAA	噔噔噔 （dengdengdeng） 呵呵呵（hehehe）	3	1	15	AッAッAッ	ハッハッハッ	1	1
					16	AッAッA	ヘッヘッヘ	2	
					17	AAA	フフフ	1	
4	AAAA		0	0	18	AAAA		0	.2
					19	AAAAッ	ダダダダッ	1	
5	AAB		0	0					
6	AB	哗啦（hualą） 咕嘟（gudu）	44	18	20	AB	グイ	3	26
					21	ABッ	ガブッ	81	
					22	ABーッ	スラーッ	4	
					23	ABン	ゴロン	43	
					24	ABーン	ウオーン	12	
					25	AッB	ドッカ	1	
					26	AッBン	スッテン	6	
					27	AンB	ザンブ	1	
					28	AンBン	ドンチャン	1	
7	ABB	咕噜噜（gululu）	10	4	29	ABB	ギリリ	1	.2
8	ABBB		0	0	30	ABBB		0	0
9	AABB	嘀嘀咕咕（di-gu-）	19	8					
10	ABAB	嘎嗒嘎嗒 （gadagada）	70	29	31	ABAB	クスクス	159	35
					32	ABABッ	カサカサッ	15	
					33	ABッABッ	ゴクッゴクッ	6	
					34	ABンABン	ガタンガタン	14	
					35	AッBAB	ザックザク	1	
					36	AッBAッB	ゴックゴック	6	
					37	AッBンAッBン	チョッキンチョッキン	5	
					38	AB－AB－		0	
11	ABC		0	0	39	ABC	グビリ	64	13
					40	ABCッ	ツルリッ	1	
					41	AッBC	サックリ	11	
					42	AッBンC	ペッタンコ	1	
12	ABCB	叮当哐当（ding dang kuang dang）	1	.4	43	ABCB	ジタバタ	5	1
					44	ABンCBン	ドタンバタン	1	
13	ABCABC		0	0	45	ABCABC	コロリコロリ	13	3
					46	AッBCAッBC	バッタリバッタリ	2	
14	ABCD	噼里啪啦 （pi li pa la）	3	1	47	ABCD	カタコト	3	.7
					48	AンBCD	ドンブリコ	1	
15	ABA	哼呀哼（hen ya hen）	1	.4					

※用例がゼロでも、陶振孝（1992）において項目が立てられているものは残してある。
※異なり語数：中国語＝243／日本語＝582

る。むしろ AB ッ型は可能だが、単独の AB 型は不自然であるという場合も多い(「ころっと転がる」「？ころと転がる」)。よって、AB 型のオノマトペは AB ッ型に代表されるといえる。

また、今回収集した資料において、日本語における C は、ABCD 型、ABCB 型をのぞけばほとんどが「リ」である。オノマトペ全体に範囲を広げても、「うっすら」など数少ない「ラ」をのぞけば、ほぼすべての C が「リ」であり、「リ」は「ッ」や「ン」と同様に接尾辞の一種であると考えられる。

ABC 型と AB ン型はともに基本形（AB）に接尾辞を付したものであるが、今回収集した資料においては、

AB ッ型81語のうち ABC 型が自然であるもの＝63語

AB ッ型81語のうち AB ン型が自然であるもの＝43語

と、AB 型において「リ」「ン」を付与できる語の数に差が見られ、その内訳も、

ABC 型／ AB ン型ともに自然（「ごくっ」「ぱちっ」「ぽかっ」など）＝38語

ABC 型自然かつ AB ン型不自然（「ぎりっ」「ぐさっ」「ぼそっ」など）＝25語

ABC 型不自然かつ AB ン型自然（「どすっ」「どてっ」「ばしっ」など）＝５語

のように、かたよりが見られる。この結果から、両性オノマトペにおいては「リ」が優勢で「ン」が劣勢と考えられる。なぜこのようなかたよりがあらわれるのか、その理由をあきらかにするために、次にそれぞれの接尾辞の意味を考える。

2.1.2.「リ」と両性オノマトペ

飛田・浅田（2002）では、その語に暗示されている心理やニュアンスを、類義語との比較によって示しており、特に「～っ」「～ん」「～り」型の、それぞれのニュアンスの違いについては多くの指摘がある。全体を通じて見ると、飛田・浅田の接尾辞「ッ」「ン」「リ」のとらえかたは、おおよそ次のようにいえる。

「ッ」：事象の瞬間をとらえた表現。

「ン」：音が響き、事象の余韻が感じられる表現。

「リ」：事象が完了したあとの状態に視点をおいた表現。

つまり、「リ」も「ン」も事象の発現以降の状態をあらわしているが、「ン」は大きな視点で見ればまだ事象のさなかにあるのに対して、「リ」は事象が完全におわっているということである。さらに、「ッ」が事象の瞬間をあらわしているとすると、「ッ」＞「ン」＞「リ」の順で聴覚がとらえる「音」から遠ざかることになる。これを裏づけるように、浅野（1978）では、「～リ」型は、擬態語・擬情語としている例が圧倒的に多く、数少ない擬音語の例のひとつである「ぐびりぐびり」も「(音)・態」とし、擬音語の用法がよわくなっていると説明している。

このような「リ」の性質は、まさに擬音語と擬態語の境界線上にある両性オノマトペのありかたと一致するものであろう。「～ッ」が可能で、かつ「～リ」が

可能である場合の「～リ」型のオノマトペは、両性オノマトペの中でもその中心に近い語であるといえる(注1)。

ところで、A型、AA型のオノマトペは、少なくとも今回収集した資料の中では、両性オノマトペであるか否かをとわず「～リ」型をつくることのできるものはない（「だっ（とかけだす）」＞「*だり」、「ささっ（と掃く）」＞「*ささり」）。これは、この型の語には瞬間的な事象をあらわしたものが多く、事象が終わったあとの状態に着目することがないためと考えられる。

2.2. 日中オノマトペのかたちの対応関係

日本語には促音・撥音・長音などがあるため、中国語に比べるとオノマトペの型は複雑であるが、表1に示したように、基本的な型は日中で共通している。それでは、日本語の型と中国語の型との間にはどのような対応関係があるのであろうか。

表2は、日中のオノマトペのかたちの対応関係をしめしたものである。ひとつの日本語に対応する中国語が複数あるものもあったため、延べ語数で調査した。この表から読み取れる特徴を以下にまとめる(注2)。

表2　日中両性オノマトペの型の対応関係（数字は延べ語数）

日＼中	A	AA	AAA	AAAA	AB	ABB	AABB	ABAB	ABC	ABCB	ABCABC	ABCD	ABA	非定型	計
A	42	6			4									32	84
AA	1	61				1	3	8				1		18	93
AAA		2	2												4
AAAA			1											1	2
AB	61	1			62			4						65	193
ABB														1	1
AABB															0
ABAB	1	82	2		12	11	23	131				7	1	119	389
ABC	28				28	1		1						44	102
ABCB		1												7	8
ABCABC		2					2	12						6	22
ABCD								3		1				1	5
計	133	155	5	0	106	13	28	159	0	1	0	8	1	294	903

（注1）「しゃきっ」「どしっ」などのようにそのままではABC型を作れないものでも、「しゃっきり」「どっしり」などのようにAッBC型なら可能なものもある。

（注2）表2においては、今回の調査で日中ともに用例を収集できなかったかたち（ABBB型など）は項目から除外してある。

(1) 日本語のCは中国語のCとの関連をもたない。また、日本語ABC型と中国語AB型の一致率が高い。

2.1.1. で述べたとおり、C ≒「リ」は「ッ」「ン」同様に接尾辞であるとわかる。

(2) 日本語のAAと中国語のAAは高い割合で対応する。ABABもAAほどではないものの、日中の一致率は高い。

冒頭にも「がぶがぶ」と「咕嘟咕嘟」の例をあげたが、同音節のくりかえしによりオノマトペをつくるのは日中共通であるとわかる。

(3) 日本語のABは中国語のA・ABと同程度の割合で対応するが、中国語のABは日本語のAと対応関係をもたない。

これが今回あらわれた大きな特徴である。日本語のABが中国語のAとも対応するということは、つまり日本語のオノマトペはABの2拍で1単位という傾向が強いということである。中国語もABの2拍で1単位をつくるが、AとBはそれぞれ単独でA型のオノマトペとして機能できることもあり、日本語のABほどその結合力は強くない。たとえば「哗啦」という中国語のオノマトペがあるが、これは「哗哗」「啦啦」の、いずれのかたちもとることができる。一方、日本語のオノマトペ、たとえば「がぶ（っ）」のようなものは「*がが」「*ぶぶ」とはいえない。ようするにABの結合力が、日本語では中国語にくらべて強いということである。

3．日中比較(2)——発音

かたちにつづいて、日中のオノマトペの発音を比較する。以下に両言語の特徴をしめす。（参照：「象声词（擬声語）」（『中日辞典』第2版、p.1626, 1627））

○日本語のオノマトペ

・ABッ、AB－ッ、ABン、ABC型（またはそのくりかえし型）の場合は、2音節目にアクセントが置かれる。

・ABAB型は、単独では1音節目にアクセントが置かれるものと2音節目にアクセントが置かれるものとがあるが、後接成分によって変化する。

→後接成分が助詞「と」＝1音節目

後接成分が助詞「に」「の」＝2音節目

後接成分が動詞＝1音節目

・ABABッ型は、必然的に助詞「と」を必要とするが、2音節目にアクセントが置かれる。

・AB型は2音節目にアクセントが置かれる。

○中国語のオノマトペ

・中国語のオノマトペは基本的に１声で発音される。ただし、「淙淙」「喃喃」など、書きことばからオノマトペになった語については、このかぎりではない。
・中国語の４音節のオノマトペは、しばしば２音節目が軽声化する（抽抽搭搭，噼里啪啦，咕噜咕噜など）。とくに２音節目が「里（哩）」の場合、その音節はいつも軽声に発音する。
・逆にAB型２音節語などでは、Bの音節を軽声に発生するとオノマトペでなくなるものがある。たとえば「咕嘟」は両音節とも１声で読むと「ぐらぐら」（沸騰する）、「ごくごく／がぶがぶ」（飲む）などの音をあらわすが、２音節目を軽声で読むと「長い時間煮る」「（口を）とがらす」など動詞の意味となる。
・中国語では２音節以上のオノマトペは、アクセントがふつう一番うしろの音節に置かれることが多い。

なお、今回用例を調査したかぎりでは、特に両性オノマトペにあらわれる特徴はなかった。かたちや意味には深くかかわる「両性オノマトペ」という性質も、発音には影響しないものと考えられる。

4．日中比較(3)――オノマトペ助詞「と」と「地」

「がぶがぶ『と』水を飲む」「がぶがぶ水を飲む」「端起一杯水，咕嘟咕嘟『地』喝了下来。」「他咕嘟咕嘟喝了几口凉茶。」など、日中ともに、オノマトペに助詞がつく場合とつかない場合とがある。日本語では「と」、中国語では「地」がオノマトペ助詞としての役割をになうが、それはどのような法則でオノマトペと接続するのか、また両性オノマトペとその他のオノマトペ全般とであらわれかたにちがいがあるのかを考える。

4.1. オノマトペ助詞に関する先行研究

日中のオノマトペ助詞に関する先行研究に中西（1997）があり、「と」と「地」の生起する条件について、かたち・意味の両面から研究している。

中西は、オノマトペの性質には、「即物」（現実に発せられた音声とそれを写したオノマトペとの語音の間に「そのままに真似ようとする」態度が感じられる）と「象徴」（「それらしく感じられる」語音を以て事態を代表する態度が感じられる）の２種があると論じ、おおまかには、

日本語：「即物」のオノマトペは「と」をともない、「象徴」のオノマトペは「と」をともなわない。

中国語：「即物」のオノマトペは「地」をともなわず、「象徴」のオノマトペは「地」をともなう。

といえるとしている。ただし中西は「AB＋リ」式に関して、バサリ—バッサリのような「AB＋リ」式と「A＋ッ／ン＋B＋リ」式の対応では、同じ基本形を持ち、意味上の共通性を保ちつつ、前者は事態とともに発生した音声を写しているのに対し、後者はそのような事態のあとに継続する状態、または音声の発生を想像できる状態を写している、という旨を論じているが、これは飛田・浅田(2002)の「『ばさり』は摩擦したり切断したりしたあとの状態に着目した表現」(p.385)、「ばっさり」については「一度に大量に切断する様子を表す」(p.408)とする説明とは食い違っており、研究者によってオノマトペの意味に対するとらえかたにゆれがあることに注意しなければならない。

中西が指摘する日中オノマトペ助詞の特徴を、以下にあげておく（一部、省略したりことばをかえたりした箇所がある)。

○日本語

・「AB＋ッ」式、「AB＋ン」式、「A＋ッ＋B＋ン」式については、「と」の生起は基本的に必須である（パチッと割れる／ドシンと倒れる／ポッカンと殴る)。
・「AB＋リ」式もおおむね「と」の生起を必要とする。
・基本音と付加音とに分析できないオノマトペについては「と」は必須である（ホウホケキョウと鳴く／ピーヒャララと奏でる)。
・頻度や程度をあらわす重畳式オノマトペに「と」を用いると不自然な文になることがある（ソロソロはじめる／ホトホトいやになる)。
・重畳式オノマトペは「と」の有無がオノマトペの意味に反映することがある（ガンガンと鳴らす／ガンガン鳴らす)。ただし、「ガンガン鳴らす」のように、二回重畳の場合にかぎり、同一音声の反復数を特定しない。

○中国語

・音声を即物的に写したオノマトペについて、オノマトペと共起する動詞が「响」「叫」のとき、オノマトペに「地」が生起する頻度は低い（肚子里叽里咕噜个没完。唧唧喳喳叫着说など)。
・「响」「叫」は音声の発生を意味するが、逆に音声の発生を直接意味しない動詞と共起するオノマトペは常に「地」が生起する（一双燕子在这儿喃喃地掠过。鞋匠在那里乒乒乓乓地忙碌など)。
・「响」や「叫」と同様に「说」も音声の発生を意味するが、これに共起するオノマトペはむしろ常に「地」を伴う（“不，我不要。”他吭吭嗤嗤地说。他嘟嘟哝哝地诉说，怎么也不答应など)。
・重畳オノマトペについては、日本語では「ガンガンたたく」のように「と」を

ともなわないと不定数の行動を想起させるが、中国語では“大时钟镗镗镗地响了九下”のように「地」をともなったほうが不定数をあらわす傾向にある。

4.2. 両性オノマトペとの関係

中西（1997）の論をもとに、日中の両性オノマトペとオノマトペ助詞の生起の関係について考えると、両性オノマトペは、「音も含まれていそうな擬態語」「様子・心情・感覚などもふくまれていそうな擬音語」と定義したが、その状況において聴覚が具体的な音をとらえることを前提としているので、両性オノマトペの性質は「象徴」よりは「即物」に近いといえる。それからすれば、日本語には「と」がともないやすく、中国語には「地」がともないにくいという傾向が見られるはずである(注3)。

今回収集した日本語582語のうち、「と」が必須であり、かつ語尾が「っ」でないもの(注4)は192語（33.0%）あった。比較のために、擬音語・擬態語を全体的に網羅する飛田・浅田（2002）を調べると、見出し語1064語のうち、同様の語は264語（24.8%）であった。日本語の両性オノマトペには、「と」がともないやすいという傾向がいちおうあらわれているといえる。

中国語の「地」の生起に関しては、後続の動詞に左右されることも多く、語そのものから「地」をともないやすいか否かを考えることはむずかしい。また、A型が一字だけでは語の安定が悪いために「地」をともなわせるという場合も多いはずであり、かたちが意味以上に「と」「地」の生起において優先される場合も少なからずあるといえる。しかし、もしも今回のような方針で収集した中国語のオノマトペに「地」がともないにくいという傾向があらわれたならば、それは、中国語にも「両性オノマトペ」の概念が存在することをしめすものとなる。これは、今後とりくむべき課題である。

5. 中国語におけるオノマトペのありかた

この章では、中国語のオノマトペにしぼって論を進める。ここまで論じてきたとおり、中国語のオノマトペは日本語と共通する点も多々あるが、一方で日本語とまったくことなる性質ももっている。

（注3） ただし、さきにもあげた「ぺちゃくちゃ」のように、両性オノマトペのあらわす音がそのまま真似ようとしているかは疑問が残る。

（注4） 語尾が「っ」であるものを除外したのは、語尾が「っ」の場合、次の成分は必然的に「と」になるため、「即物」「象徴」の態度と「と」の生起の関連を考えるにあたって不適当と考えられたからである。中西も論文中で、日本語の「〜ッ」型に「と」がつくのは、促音と動詞の第一音との安定した関係という側面も大きいと指摘している。

5.1. 非定型オノマトペ・概念化されるオノマトペ

前掲の表２にあげた「非定型」とは、収集した中国語のうち、いわゆるオノマトペの定型（A 型、AB 型、AABB 型……）にあてはまらないものである。今回収集した延べ903例のうち、中国語の非定型は294例存在した。その内訳は、「闹哄哄」「紧紧」「结实结实」のように、一見定型のオノマトペのようはあるが、形容詞のくりかえし型、あるいは状語用法の形容詞であるもの、あるいは動詞一語でオノマトペの意味を包括しているものなど、さまざまである。

294例のうち、一見定型のオノマトペらしいかたちのものは75例（25.5%）あった。中でも ABB、AABB 型が多いのは、やはり形容詞の重畳形が多いことをあらわしている。また、「一屁股坐下」「一窝蜂地」「一步一步」など「一」を含む数量詞、動量詞になる場合も多く、59例（20.1%）があった。

また、副詞や「地」をともなう形容詞などが動詞を修飾することで日本語のオノマトペに匹敵する機能を持たせている場合も多い。たとえば「猛（地）」で訳される日本語のオノマトペは「ぐさっ」「ずぶり」「どきっ」「どっきん」「どーっ」「ぱくり」「ぴたっ」「ぴちっ」「ぽかり」の９語があった。形容詞の重畳形と重なるが、「轻轻（地）」で訳されるものも８語あった。中国語では、形容詞や副詞の持つ概念的な意味が、さまざまな状況をあらわすのに用いられると考えられる。

なお、大河内（1979）は、こうした副詞になるものに関して、時間副詞や一音節に「地」「然」などのついた擬態語的な副詞が多いとし、また、さきにあげた動量詞に関しては、日本語には動量詞というものがないため、動作量を単位語を使わないで漠とあらわすには、「ちょっと、そっと、ちらっと」などの擬態語を使うよりない、と説明している（p.3）。

また、徐一平（1982）では、中国語にはいわゆる「擬態語」という用語はないが、それに相当する語がないわけではない（p.24）とし、擬音語の分類でいえば ABB 型のかたちをしたもの（气冲冲，贼溜溜，笑眯眯，亮堂堂，肉呼呼，醉醺醺など）が多いとするものの、いずれも冒頭の一字はもともと形容詞（まれに動詞、名詞）であるから、日本語の擬態語とは異なり概念化されているといえる、と論じている（p.24-25）。

さらに、中国語のオノマトペの概念化は、副詞や形容詞といった様態をあらわすものにはとどまらない。瀬戸口（1984）は「日本語に比べ中国語の擬音語・擬態語が少ない大きな理由として、動詞の違いがある。即ち中国語の動詞は日本語のそれと比較し、より具体的で細かく動作を表わすことが多い」（p.16）と論じ、「見る」だけで、中国語では「看」（見る）「盯」（まじまじ見る）「瞪」（じろっと見る）「瞭」（さっと見る）「瞟」（じろじろ見る）「瞥」（横目でちらっと見る）「盼」（きっと見る）などに分かれるとしている。

今回収集した語にもそのような用例は見られ、たとえば「ぶつぶつ言う」など

は「嘟囔」という動詞一語であらわすことができる。音を含んだ語でさえも、中国語ではひとつの動詞であらわすことができるということである(注5)。

5. 2. ABAB 型・AABB 型の存在

中国語では基本的に動詞が ABAB 型の反復、形容詞が AABB 型の反復をとるが、オノマトペでは両形式が存在する。動詞または形容詞がオノマトペ化し、重畳形をとる場合には、もとの品詞の法則は適用されない。たとえば「うじゃうじゃ」をあらわす「咕容」などは、「うごめく、もぞもぞとはう」という意味の動詞であるが、オノマトペ化するときには AABB 型を取る。中国語のオノマトペは、かたちは動詞・形容詞などと類似していても、別の品詞として独立した性質を有していることがわかる。なお、中国語の AABB 型は二つの AA 型をならべてできている場合もあるので、重畳形のオノマトペから元となる成分を抜き出そうとする際には注意が必要である。

6. まとめ

以上、「両性オノマトペ」という視点から日中のオノマトペを観察し、両言語のオノマトペについてふれてきたが、冒頭の「中国語のオノマトペは音をあらわす場合にしか用いられないのか」という問題に立ち返ってみると、現段階では、中国語では形容詞、副詞、動詞などがオノマトペの意味を概念的に含むという傾向が強いために、やはりオノマトペは音をあらわすのに特化しており、積極的に両性オノマトペという範疇を定義はできないということになりそうである。

しかし、前項で見た「咕容」は、日本語では「もぞもぞとはう」と訳される、まさに概念的にオノマトペの意味を含む動詞だが、『中日辞典』(第2版)では動詞の意味しか掲載されていないにかかわらず、日常会話ではすでにオノマトペとしての用法を獲得している。かつては音をあらわすのに特化していた中国語のオノマトペが、近年その性質を変えてきているのである。また、いまだ『現代汉语词典』(第5版・第348刷、2006年2月)など中国語の辞書には「擬態語」にあたる「拟态词」という見出しはないが、筆者の所属する研究室の中国人留学生にたずねたところ、「拟态词」ということば自体は理解できる(ただしその範疇にふくまれる語はすぐにはおもいつかない)ということであった。

このまま中国語オノマトペの変容が進めば、将来的には「音」から飛び出し、「様態」を、さらには「音と様態をかねたもの」をもオノマトペがあらわすようになる可能性は十分にあると思われる。

(注5) ただし、「嘟嘟」にも「囔囔」にもオノマトペとしての意味があることを考えると、この「嘟囔」という語は、きわめてオノマトペよりの動詞であるといえそうである。

【参考文献】
浅野鶴子（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店
天沼寧（1974）『擬音語・擬態語辞典』東京堂
大河内康憲（1979）「日中擬声語対照用例集」（『中国語』229 大修館書店）
金田一春彦（1978）「擬音語・擬態語概説」（浅野（1978）内に収録）
瀬戸口律子（1984）「擬音語・擬態語表現（日本語—中国語）について」（『大東文化大学紀要〈人文科学〉』22）
田守育啓（1991）『日本語オノマトペの研究』神戸商科大学研究叢書
中西正樹（1996）「オノマトペ研究(3)」（『摂大人文科学』３）
中西正樹（1997）「日中オノマトペ助詞の比較—「と」と「地」—」（『中国語学論文集』大河内康憲教授退官記念刊行会 東方書店）
野口宗親（1995a）「中国語擬音語概説」（『中国語擬音語辞典』東方書店）
野口宗親（1995b）「中日対照擬音語語彙表」（同上）
飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法事典』東京堂出版
郭華江（1994）『日中擬声語・擬態語辞典』東方書店
陶振孝（1992）「中国語と日本語の「擬声語」についての対照」（『講座日本語教育』27 早稲田大学日本語研究教育センター）
徐一平（1982, 83）「日本語の擬音語・擬態語の綜合研究（上）（下）」（『中国語研究』21, 22 白帝社）
呉川（2005）『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』白帝社

（いしかわ　そう／文学研究科人文科学専攻博士後期課程１年）